

## 知床岬における管理事業（個体数調整）の今後について（事務局案）

### 過去 3 年間の密度操作実験の結果から

知床半島エゾシカ保護管理計画には知床岬地区（特定管理地区）の管理目標は「エゾシカの採食圧を軽減することにより、風衝地群落・山地性高茎草本群落・亜高山性高茎草本群落を含む生物多様性を保全するとともに、過度の土壤浸食を緩和する」とある。

また、当地域の密度操作実験では、以下のような方針が定められた。

「まず、対象地域のシカの個体数調整の実現可能性を検討するために、メス成獣の推定生息数の半数を 3 年間にわたって毎年捕獲することで、シカの総数を半減させることができるかどうかを検証する。その上で、もしそれが可能であった場合は、4 年目以降、さらなる本格的な個体数の削減に踏み込む。」

毎年メス成獣の半数を捕獲するということは実現できなかったが、実験開始時の推定越冬数を半減させることには成功したものと考えられる（資料 2-1 参照）。イネ科草本の現存量やクマイザサの被度、草丈については増加傾向が見られ、風衝地群落・亜高山性高茎草本群落においても一部で若干の回復傾向が認められる。これらは 2 年間の捕獲による成果（3 年目については、本年夏に調査予定）といえるが、捕獲を中断すれば、個体数は増加に転じ、中長期的に効果を維持することは困難である。

また、シカによる強度の採食圧を受ける以前（1980 年代前半）の状態にまで植生の回復を図るためには、現状よりさらなる密度操作を行う必要がある（当時の密度を 5 頭/km<sup>2</sup>程度と仮定すれば、特定管理地区ホロモイ湾北部～カプト岩以北約 7 km<sup>2</sup>に 35 頭）。しかしながら、現状の巻狩りを主体とした銃猟による手法では、さらなる捕獲の効率化、コスト圧縮には限界があり、また、希少猛禽類の営巣木周辺での捕獲を避けることが困難である。管理目標達成に向けて中長期的に事業を継続するためには、省力化、コスト圧縮が可能な計画立案が必要である。なお、今年度の航空カウントの結果から、知床岬個体群は閉鎖系ではない可能性があり、この点についても留意する必要がある。

### 今後の展開について

#### 1. 密度操作実験の今後の方向性

3 年続けてメス成獣の半数を捕獲するという目標は達成できなかったが、3 年間の実験により実験開始時の推定越冬個体数を半減させることには成功した。また、3 月の航空センサスによる越冬個体数は 35 頭と、捕獲による攪乱効果により、シカの岬台地上の利用頻度の低下なども見られた。個体数の減少や攪乱による忌避効果により、わずかながら植生の回復傾向が確認されており、今年はさらに植生の回復傾向も期待できる。よって、引き続き知床岬地区において密度操作実験を継続することが適当であると考えられる。なお、捕獲の実施にあたっては、効率的な捕獲手法の採用に努める。密度操作実験の継続にあたっては、管理目標にある「エゾシカの採食圧を軽減することにより、風衝地群落・山地性高茎草本群落・亜高山性高茎草本群落を含む生物多様性を保全するとともに、過度の土壤

浸食を緩和する」ことを目指し、7～10年の中長期的な密度操作実験を実施する。エゾシカ個体群密度を5頭/km<sup>2</sup>程度とすることを暫定的な目標としつつ、植生の回復状況をモニタリングし、個体数密度および植生の回復状況を考慮して捕獲の停止や捕獲の強弱の検討などを行う。

## 2．知床岬で実施する場合の捕獲手法

今後、捕獲を継続した場合には知床岬地区における密度が低下し、捕獲効率がさらに低下すると考えられるため、より効率的な手法による捕獲の実施が求められる。現在の捕獲方法では、対象地域が約7km<sup>2</sup>と広いため、シカの囲い込みには大人数を要し、かつ、希少猛禽類営巣木周辺へのシカの逃げ込みを防ぐことができない。そこで捕獲補助のための仕切り柵を設置し、捕獲地域を区切ることで、シカの移動を制限し、捕獲に係る人員、捕獲回数の削減を図り、捕獲の効率化、経常的な捕獲コストの縮減を図る。

その他、仕切り柵によって希少猛禽類営巣木周辺での捕獲を回避することもできる。仕切り柵内での捕獲によって、忌避効果が出て柵内のシカが少数になってしまう場合には、シカの低密度化が期待できる。また逆に、知床岬の越冬地としての環境は優れているので、柵内で捕獲しても繰り返し周辺部からシカが流入する場合には、柵内のシカを効率的に捕獲できる装置としても機能し、周辺部も含めた広域的なシカの個体数削減に寄与できる。

また仕切り柵設置の課題である景観上の配慮については、可能な限り林内に仕切り柵を設置し、海上あるいは草原部から柵が視野に入らないようルート選定段階で配慮する。仕切り柵の詳細については別紙資料2-4参照。

H23シカ年度以降は、仕切り柵を活用した銃猟による捕獲を実施する。船舶を用いた日帰り捕獲を中心とし、流氷期前と流氷期後に3回程度の捕獲の実施を想定している。

なお、仕切り柵は初期設置費用が必要となるが、捕獲に係る費用は現行の手法より低減させることが可能であり、知床岬地区と並行して他地区での実験の実施も可能となる。

## 3．H22シカ年度の対応について

今回のWGでの合意を得た後、直ちに工事に着手しても、設計および測量に3～4カ月、資材運搬および設置工事に5カ月程度かかることが予想され、今年度中に全てを完成させることは難しいと思われる。なお、資材運搬にはヘリコプターを用いることとするが、希少猛禽類への影響を考慮し、原則として営巣期間中には営巣木周辺での資材運搬は行わないこととする。

仮にH22シカ年度の捕獲実施時期までに仕切り柵の設置が完了していない場合は、従来と同様の手法による捕獲を実施する。過去3期にわたる捕獲では、11月下旬～6月上旬にかけて捕獲を実施してきたが、融雪が進む4月後半以降については捕獲効率が著しく低下することから、基本的に積雪期に捕獲努力を集中させることが捕獲効率の向上につながると考えられる。これを前提に、費用・捕獲数・希少猛禽類への影響等を勘案した上で、次の3案が考えられるが、H22シカ年度は1)多捕獲型による捕獲を実施することが適当と考えられる。

1) 多捕獲型 (流水期前に船舶で日帰り1回、流水期にヘリ宿泊1回、流水期後に船舶で日帰り1回程度)

もっとも多くの捕獲が期待できるが、H21シカ年度では流水期のヘリによる捕獲から約1カ月の間隔をあけた3月28日の捕獲において、シカの警戒心が強く、対象地域内のシカの密度が低い状態であり、捕獲総数9頭メス成獣3頭という成果であった。よって、流水期後の積雪期であっても、流水期前、流水期の捕獲の影響は大きいと考えられる。シーズン初回捕獲となる流水前期、もっとも多くの越冬個体が集結している流水期の捕獲を主体と考え、流水後期捕獲は補完的な捕獲と位置付ける。

費用は従来より低く抑えることが可能。

2) 厳冬期集中捕獲型 (流水期前に船舶で日帰り1回、流水期にヘリで宿泊1回)

流水期のヘリ捕獲に捕獲努力を集中させる(ヘリ捕獲宿泊延長、餌付けなども検討)、餌付けなど連続捕獲による捕獲効率低下を防ぐ工夫が必要である。

3) 低費用・流水期前後捕獲型 (流水期前と流水期後に船舶で日帰り各1回、合計2回)

多くの捕獲数は期待できないが、低費用で実施可能なため、中長期的に継続実施可能。

昨年度1月20日の船舶による日帰り捕獲は、海況、積雪状態に恵まれ、さらに巻狩りにおいて効率的な群れの囲い込み成功したことで過去最高の捕獲頭数を達成した。しかし、実施の2日後には網走で流水初日を迎え、もし実施が遅れていれば、現地到達が危ぶまれる状況であった。また回収作業を実施した3月18日には、知床岬文吉湾付近沿岸のみ、流水が残存しており、特に避難港内は流水に埋め尽くされていた。当日は回収作業で残滓運搬のため流水に比較的強い漁船型の船舶を傭船していたため入出港可能であったが、通常捕獲時に傭船する乗船定員が多いクルーザー型の小型観光船では入港できない状況であった。流水も含め、冬期の海況の変化は予測が難しく、船舶のみを知床岬に到達手段として捕獲計画を立案した場合、リスクが生じる。また、流水接岸期間中に1回程度捕獲をすることは、全く捕獲を実施しない場合に比べ、効果は大きい。前後の捕獲と十分な間隔を空けて連続捕獲による効率低下を免れる意味でも有効である。